

# 高齢者の役に立つ 実学としての「老年学」を 成立させたい。



## 医療福祉学部教授 井口昭久

### 【学歴・職歴】

1970年 名古屋大学医学部卒業  
1971年 名古屋大学医学部第三内科入局  
1978年 愛知医科大学第一内科講師  
1978年 ニューヨーク医科大学留学  
1981年 名古屋大学医学部第三内科助手  
1990年 名古屋大学医学部第三内科講師  
1993年 名古屋大学医学部老年科教授  
2001年 名古屋大学医学部附属病院副院長  
2003年 第45回日本老年医学会学術集会会長  
2004年 名古屋大学医学部附属病院院長  
2007年 愛知淑徳大学教授

### 【受賞歴】

1987年 日本神経内分泌学会川上賞受賞  
1999年 大和日英基金学術賞 (Daiwa Eidorian Priz)

### 【理事】

日本老年医学会、日本老年学会、日本認知症学会、日本臨床栄養学会



【井口先生の主要著作リスト】 □ 編著書 □ 著作  
○「おとしよりとくらすくらす—高齢者の介護のてびき—」社団法人日本老年医学会編 文光堂 1996  
○「改訂版 老年医学テキスト」社団法人日本老年医学会編 メジカルビュー社 1997  
□「ちよっとしみじみ 悩みつきない医者人生」風媒社 2004  
○「これからの老年学 サイエンスから介護まで」名古屋大学出版会 2005

## 私

の専門は老年医学であります。したがって研究の対象は医学研究であります。最近では医学を核にした老年学にシフトしています。老年学とは老年に関する医学、生物学、社会学などを広く包括する学問であります。

人口構成の急速な変化が人の心に影響を与えています。昨今の政治の状況や社会の現象はこの高齢化のスピードと無縁ではありません。

65歳以上の人口が国民の7%を超える社会を高齡化社会と呼びます。わざわざそのような呼び方をするという事は、その時代までその社会に老人が多くはなかったからであります。昔から老人は存在していたのですが、65歳を過ぎて永らえる人はほとんどいませんでした。老人がちらほら目につき始めたので高齡化社会と名づけたのであります。

老人が増えてきたなと感じ始めるときは、65歳以上が14%を超える頃であります。この社会を高齡社会と呼ぶことにしました。名実共に高齡

者の多い社会であるからであります。高齡化社会から高齡社会になるまでに、日本はわずか25年でありました。フランスでは114年かかっています。フランスでは日本の明治時代に既に高齡化社会であったのです。スウェーデンで84年、比較的早いイギリスでも47年かかっています。日本以外の先進国では、ゆっくりと年寄りの多い国としての制度や、人の気持ちを整えて社会資源を蓄えてきました。

日本は1980年代の初めまで、先進国の中で高齡者の一番少ない国であったのですが、2002年には、最も高齡者の多い国になりました。鈍行から新幹線に乗り換えたほどの高齡化のスピードの変化であります。世界中の国々が今後の日本の行方に注目しています。

本にも昔から老人に関する学問は存在していました。例えば老年社会学、老年介護、老年のための建築、老年の心理学、老年のための経済学などです。これらの学問はそれ相応に発展してきました。しかしこれらの学問は個別に発展してきており実際の、眼の前にいる高齡者にあまり役にはたつてきませんでした。

個別の学問を個々の老人に当てはめることができるように、一貫性と連続性を持たせようとするのが、老年学です。今後ますます増大する老人の理解には必須の学問です。そして今後、企業でも、銀行でも教育現場でも老人に対する深い洞察をもった人材が待たれています。

井口先生は中枢神経系と代謝調節というテーマの基礎研究に取り組んでいましたが、留学を経て、老年医学に転換。高齡者医療に尽力したのち、名古屋大学附属病院の院長に就任されました。名大退職後の昨年5月からは愛知淑徳大学クリニックで糖尿病外来を担当し(毎週木曜)、学部と研究科でも高齡医学について教鞭を執っています。老年学はアメリカで1970年頃から始まった学問。日本では急激に高齡化が進んだため認知度が低く、「学問体系も社会体制も追いついていない状態」「高齡者の役に立つ実学としての学問にしたい」との希望を抱かれています。ウィットに富んだ軽妙な語り口のエッセイには定評があり、朝日新聞連載の「老年学」(毎月第2木曜)は6年目に突入。現在3刷の「悩みつきない医者人生」に続くエッセイ集第2弾も準備中とのこと。